

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2541 号 2015.7.17 発行

静岡) 統合失調症の妄想恋愛詩人、ムラキング

朝日新聞 2015年7月15日



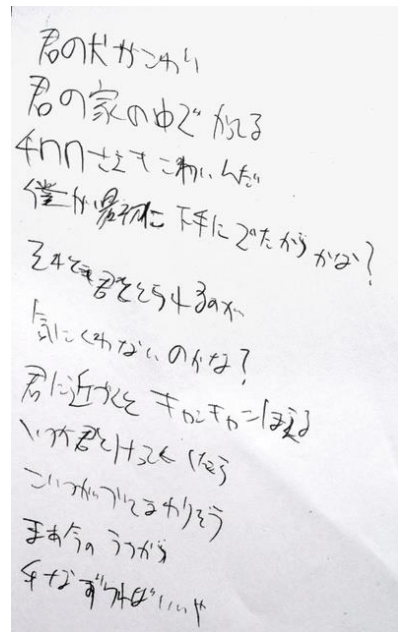
作の詩を朗読するムラキングさん＝
浜松市中区田町

ムラキングさんの手書きの詩

幻聴や妄想といった精神障害、統合失調症の特徴を生かし、恋愛の詩を思いつくまま書いているムラキングこと村木大峰(ひろみね)さん(34)＝浜松市中区＝。「妄想恋愛詩人」を名乗り、舞台上で即興詩を披露するなど活躍の場を広げている。

「君の犬が可愛い／君の家の中でかatterる／チワワさえもこわいんだ／僕が最初に下手にでたからかな？／それとも君をとられるのが／気に入らないのかな？」(後略)

ムラキングさんがルーズリーフにつづった無題の詩だ。彼女ができたなら自宅に行きたいなと想像すると、犬が苦手なことを思い出し、背後からいろんな声が聞こえてきたという。



介護付き旅行や出張ラーメン店 札幌で事業化 北海道

朝日新聞 2015年7月15日

介護付き旅行に出張ラーメン店。介護が必要な高齢者向けのこんなサービスを札幌市の若手経営者が始めた。人口一極集中と高齢化が進む同市で、「楽しみ」を持ち続けてほしいとの思いから生まれた事業だ。

介護付きの旅行事業を始めた秋吉の秋吉壮俊社長＝札幌市中央区

介護付き旅行の「夢たび」は、要介護者の日帰りや宿泊付きの温泉旅行に介護資格者が同行する。旅先での血圧計測や入浴後の湿布薬の介助、おむつ交換や入浴介助などにも、きめ細かく対応するのが特徴だ。札幌市の不動産会社「秋吉」が6月から始めた。

すでに数件の問い合わせがあり、今月は親子4世代で同市の定山溪温泉へ日帰りする予約があるという。

秋吉は登別温泉で94年間続いた「秋吉ホテル」を営み、いまは江別市で通所介護施設などを運営する。

「利用者から『温泉旅行なんてもう無理ね』との声を聞いたことが事業化のきっかけだった」と5代目の秋吉壮俊（たけとし）社長（34）は言う。国内旅行の企画・募集が出来る「旅行業登録」を昨年12月に取得した。

介護資格者1人が同伴・同泊する1泊2日の定山溪温泉宿泊プラン（要介護者を含め家族4人利用）で約9万3千円。日帰りプランは約4万3千円。一人旅などの要望にも対応する。

通常の旅行料金の2～3倍するが、介護資格者は自社の社員と専属契約ヘルパーをあてており、秋吉社長は「安心感で需要を掘り起こしたい」と話す。

高齢者施設で「出張ラーメン店」を開くのは、札幌市北区の「麵処そめいよしの」の新宅崇さん（38）。

「麵処そめいよしの」店主の新宅崇さん＝札幌市北区篠路

脱サラして昨年10月に店舗を構えた一方、依頼があると、施設の調理室にずん胴鍋を持ち込んで提供している。5千円の出張費がかかるが、ラーメンは同じ値段。豆乳でまろやかに仕上げたみそや和風しょうゆなどどれも店舗と同じ味だ。今年2月の初回の出張では45食が売れた。口コミで市内だけでなく、石狩市の施設からも依頼があった。



高齢者施設に入居する義父が「外食がしたい、本物のラーメンが食べたい」と嘆いたのを聞き、事業を思いついた。新宅さんは「のびた麺を届けたくない。施設調理なら、かためん、柔めんの加減もできる。要望があれば残さず食べられるミニサイズも可能です」と張り切っている。

問い合わせは、秋吉は(011・211・1424)、「麵処そめいよしの」は(011・299・2297)へ。
(加賀元)

バリアフリー社会どう思う？ 障害者らが「しゃべり場」 東京新聞 2015年7月16日

障害者が今の社会をどう感じているのか知ってもらおうと、障害者らが言い合うイベント「しゃべり場」（社会福祉法人A J U自立の家主催）が名古屋市内であった。身体障害や自閉症、統合失調症などの障害とともに生きる六人が登壇。会場に詰めかけた二百人とともに、すべての人が暮らしやすい社会の実現を願った。（佐橋大）

「自閉症の植松です」と口火を切ったのは植松龍一さん（32）。植松さんが電車に乗ったときに困るのは、改札口付近にあるはずの精算機だ。「駅によって置いてある場所が違い、分からなくて困る」。健常者は探せば済むと思うことでも、発達障害の人は決まった場所がないことが不安につながってしまうことが多い。

障害者は、外出すると困難にぶち当たる。生まれつきの病気で、車いすが必要なフィリピン国籍のエンリケス・マルビンさん（18）は、エレベーターの車いす用ボタンを取り上げた。「低い位置にないとボタンを押せない。他の人が来るまで待つこともあります」

オートバイレース中の事故で下半身不随になった元レーサー芳賀健輔さん（42）は、飲食店の障害者用駐車場の整備を要望した。障害者用スペースは通常よりも幅広で、車いすでの乗り降りが楽にできるようになっているため、インターネットで障害者用があるかどうか事前に探している。

飲食店内にも壁はある。「ムードを出すために照明を落としてある店が多く、メニューに何が書いてあるかだけじゃなく、何を食べているかも見えないんです」。ユーモアを交えて語ったのは、弱視で聴覚障害もある小林功治さんだ。「男性の低い声は聞き取りにくく、女性の高い声は聞きやすい。誤解されます」と笑いを誘った。

偏見が根強い精神障害は、会社に病名を伝えることにためらう人が今も多い。統合失調症の井上雄裕（たけひろ）さん（47）は「僕は病名を会社に告げているが、病名を隠して働くと体調が悪い時にすごくつらい。オープンにしても大丈夫な世の中にしたいという

のが願いです」と発言した。

脳性まひで手足が不自由な滝由依さん（26）は学生時代、セルフ式の食堂でカレーをよく食べていた。「私がカレー好きと思っていた人がいるかもしれないけど、お盆を多少傾けてもこぼれないから。一人では汁物は持って来られない」

誰かに助けを求めればと問いかげられると、滝さんは「私が将来、誰にも頼らずに生きていけるようにとの思いから、自分で何でもやりなさいと両親に言われてきた。助けを求めるのが苦手なんです」と生きづらさを語った。

◆住みよい街づくり 進化の途上

駅や道路、公園にバリアフリー化を義務付ける二〇〇〇年の交通バリアフリー法と〇六年のバリアフリー新法の施行などで、障害者も住みよい街づくりが進みつつある。各自治体は、バリアフリー化の対象を拡大する独自の条例も制定。障害者の利用が増えた飲食店の中には、自発的にトイレを障害者用に改装することもある。

しかし、日本盲人会連合（東京都）によると、点字ブロックを視覚障害者が見やすい黄色以外に着色する自治体も。精神障害に対する偏見はまだ根強く、長期入院している人の社会復帰はなかなか進まない。

「障害者が街に出やすい環境づくりや、人々の意識の変化はこの十五年で随分進んだ。障害者が社会に出て、接する機会がさらに増えればもっと違ってくると思う」。A J U自立の家職員の木下努さん（50）は指摘する。

障害者の店支える割引クーポン券 足立区、全32万戸に配布

東京新聞 2015年7月16日

飲食や手作りのポットマットなどを販売する「喫茶レスポワール」=足立区で

足立区は、障害者が働く飲食店や福祉施設の利用を区民に促すため、区内の全32万戸に商品代金の値引きに使えるクーポン券を配布した。心身に障害のある人が働いたり、社会参加に向け訓練したりしている区内23の飲食店や福祉施設、作業所などで利用できる。国の交付金を活用し、障害者の就労支援の一環として区が企画した。（松尾博史）



障がい福祉課によると、カラー刷りのチラシに添えられたクーポン券は、百円分が二十枚の計二千円分。購入金額の四割分までの支払いに充てられる。クーポン券が使われた金額を区が集計し、店側に支払う仕組みという。

チラシは六月下旬に全戸配布され、十二月二十八日までクーポン券を利用できる。各店の所在地や取扱商品はチラシに掲載しており、軽食や弁当、パン、菓子類、雑貨などを販売している店が多い。

足立区綾瀬五の「喫茶 レスポワール」は利用可能店の一つ。カレーライスやケーキ、コーヒーなどを提供するほか、手作りのポットマット（鍋敷き）や髪留めを販売している。運営するNPO法人レスポワールによると、精神・知的障害のある約二十人が接客や調理を担当したり、近くの作業所でケーキや小物の製作販売に励んだりしているという。

理事長の勝本正実さん（65）は「障害者が社会に出るためには、本人の努力と社会の理解の両方が必要。クーポン券の活用をきっかけに理解が広がり、誰もが住みやすい街になれば」と期待を寄せている。

障害者に働く場 神戸電鉄葉多駅前に開設 小野

神戸新聞 2015年7月16日

兵庫県小野市葉多町の神戸電鉄葉多駅前に障害者の働く場「ワークひろば」がオープンした。企業などに就職の難しい障害者へ職場を提供する就労継続支援B型事業所で、利用

者は菓子箱の組み立て作業などで工賃を得る。16日午前10時～午後4時に内覧会があり、誰でも見学できる。(吉田敦史)

「ワークひろば」を開く富田たき子さん(左)と、利用者に教える作業を練習する職員ら＝小野市葉多町

同市のNPO法人「ひろばの会」が運営する。理事長を務める富田たき子さん(63)＝同市鹿野町＝は障害者支援施設「小野起生園」(同市新部町)に定年まで勤め、障害者が2年間の就労移行支援を受けた後も、なかなか一般就労できない現状を見てきた。



B型は、雇用契約を結んで働くA型と比べると自由で、調子が悪い時は休憩室で休むこともできる。同市のB型事業所は公的な2施設しかなく「地域に障害者を受け入れる場所がもっと必要」と1月に同法人をつくり、開設準備を進めてきた。

事業所は、同駅前2階建ての1階部分114平方メートル。利用者は午前9時40分に出勤し、ラジオ体操と朝礼の後、50分間の作業と10分間の休憩を、昼休みを挟み4回繰り返す。

加西市の紙器印刷会社から仕事をもらい、ケーキや菓子、電器製品を入れる箱を折ったり組み立てたりする。

週1回は午前を散歩やスーパーへの買い物体験、音楽療法などリフレッシュ活動に充てる。隣接する畑で農作業をすると賃金は割り増しになる。定員は10人。

富田さんは「誰しもすべきこと、行くべき場所があることが大事。障害に応じて生き生きと暮らすきっかけを提供したい」と話している。ワークひろばTEL0794・60・2692

ディーセントワーク推進を 中小企業家同友会がA型事業でフォーラム

福祉新聞 2015年07月15日 福祉新聞編集部

講演する天野氏

中小企業家同友会が主催する障害者就労継続支援A型事業者全国フォーラムが6月25・26両日、神奈川県内で開かれた。同会がA型事業についてのフォーラムを開催するのは初めて。全国の会員など約150人が参加した。



障害者に最低賃金以上の報酬を払う雇用契約を結び、就労の機会を提供するA型事業は今年2月、全国団体も立ち上がった。現在38都道府県に支部ができるなど注目も大きい。

2015年4月時点では、全国に2707事業所あり、4万8303人の利用者が勤務。5年前と比べると、事業者と利用者いずれも4倍以上に大きく増えている。

事業主体は13年時点で、営利法人が43%を占め、社会福祉法人が24%、NPO法人が23%。ただ、14年6月、A型の制度を悪用し利用者を劣悪な環境で働かせたり、収益の上がない仕事をさせたりする事業所のことが報道されるなど、批判も起きていた。

フォーラムでは、天野貴彦・ディーセントワールド代表理事が障害者雇用の現状などについて説明。その上でA型事業をめぐる批判について「ほかの事業者を批判したり排除したりするのではなく、良きA型モデルを提唱したい。自分たちが何を理想とするかが問われている」と述べた。

具体的には、「働きがいのある人間らしい仕事」を意味するディーセントワークの視点を持つべきだと主張。同友会がこのほど作成したA型事業所の達成度評価表を活用してほしいと訴えた。

また、分科会では、A型事業を実践する上での課題を共有するグループワークも行われた。参加者からは「いかに補助金を使わずに、事業だけで給与をまかなうかを考えている」

「頑張って一般就労に移行させても事業所は全体として戦力ダウンになってしまう」などの意見が出た。

病気の子に読み聞かせ…絵本は社会へつなぐ窓 医療現場、図書館でも支援

読売新聞 2015年7月16日

絵本は、日々成長する子どもの世界を広げ、心を育む。病気の子どものも同じだ。危機的な状況だからこそ、大きな力をもたらすこともある。医療現場はもちろん、地域の図書館でも支援の輪が広がっている。

「ひらがなを読めるようになったのね」

静岡県立こども病院（静岡市）の医学図書室の一角にある「わくわくぶんこ」。司書の塚田薫代さん（55）が、大きな声で絵本を読む「みーちゃん」（4）に優しく話しかけた。

みーちゃんは2012年、急性脳症にかかり、同病院に入院した。1か月後、母（42）は「娘の病気を知りたい」と医学図書室に足を運び、塚田さんと出会った。寝たきりで反応が鈍い様子や、今後の成長への不安を訴えると、思いがけない返事があった。

「私が絵本を読むと、ちゃんと聞いてくれますよ」

娘のことを知っていたことに驚き、病室でも読み聞かせができると気づかされた。早速、お気に入りの絵本「いないいないばあ」（童心社）を借りた。ベッドの上で絵本を開くと、いつも視線が定まっていなかったみーちゃんが、目を留めた。読み聞かせると、決まって笑っていた「ばあ」の場面でにこっとした。「ちゃんとわかっている、と希望がわいた」と振り返る。

その後も、読み聞かせを続けた。「絵本がなければ、気持ちは沈んだままでした。娘にも、貴重な楽しい時間になった」と話す。

同病院では、集中治療室や病棟にも、絵本が置いてある。面会時間が終わり、親が帰った午後8時過ぎには、ボランティアが病室で一人一人に、読み聞かせる。

塚田さんは「親から離れ、知らない人に囲まれるストレスの多い生活で、絵本は、外の社会とつながる窓になり、心の安定をもたらします」と説明する。

退院後の子どもが暮らす地域の図書館でも取り組みが始まっている。

長崎市立図書館（長崎市）では、昨年と今年の2回、長崎大学病院と共催で、在宅の小児患者と家族を支援するイベントを開催した。生活や就学に関する講演や、絵本の読み聞かせ会は、予想を上回る参加があった。難病の長男（4）を育てる主婦（33）は、「病院と違う日常の場だからこそ、きょうだいも楽しめ、図書館を利用するきっかけになりました」と話す。

同館児童サービス担当の司書黒岩綾香さん（34）は、今も参加者の親子と意見交換を続ける。「患者や家族の支援のため、さらに何ができるかを考えていきたい」と話す。

様々な人が行き交う図書館ならではの役割も期待されている。

ノンタンシリーズで知られる出版社「偕成社」（東京都新宿区）は昨年7月、「子どもの『からだ』と『こころ』『さまざまな障がい』について理解を深める本のリスト」を作り、全国の公共図書館に送った。リストを活用して、病気や障害に関する絵本や児童書の展示コーナーを設けた図書館もあった。

リストの作成に協力した塚田さんは「病気を持つ子どもや家族は、周囲に理解者がいると、生きやすくなります。多くの人に、わかりやすく、親しみやすい絵本を通じ、病気への理解を深めてほしい」と話す。（中島久美子）

◇

「子どもの『からだ』と『こころ』『さまざまな障がい』について理解を深める本のリスト」 病気の子どもの主人公の絵本や、体の仕組みを説明する児童書など、偕成社の約100冊を収録した。ホームページ (<http://www.kaiseisha.co.jp/business/download.html>) の「バリアフリー本のリスト」からダウンロードできる。



100店以上協力

子供たちに利用が広がっている「まーぶ」(大阪府箕面市で)

大阪府箕面市で、「まーぶ」という愛称の子供向け地域通貨が広がりを見せている。

協力店で仕事を手伝うともらえ、お金代わりに使える仕組みだ。家庭の経済的事情で十分に食事を取れない子供がいる現状を知った地元のNPO法人が始め、利用できる店は100を超えた。子供の頃から働く感覚を養い、将来の自立につなげる試みだ。

20分で100円分

6月下旬、箕面市西宿にあるショッピングセンター「みのおキューズモール」。屋外店が並ぶイベント会場で、「Working」と書かれたビブスを着た子供たちが、大人に交じって手伝いにいそしんでいた。

チラシ配り、客の呼び込み、イベントPR用の写真撮影……。会場の一角にあるボードに、各店が出した求人票「おしごとカード」が並ぶ。対象は18歳以下。どの仕事(1回20分)を選んでも100円分の「100まーぶ」がもらえる。仕事の「はしご」も可能だ。

「働くことを体験できるのが楽しみ。社会の一員になれた感じがする」。常連という小学校5年の男児(11)は目を輝かせた。

「まーぶ」は、「学ぶ」「遊ぶ」の意味。地元のNPO法人「暮らしづくりネットワーク北芝」が2011年に発行を始めた。

同NPOは、運営する箕面市立萱野中央人権文化センターで、経済的に苦しかったり、両親が共働きだったりして孤立しがちな子供たちの「居場所」などを提供。毎日数十人が利用しているが、昼ご飯を食べていない子供たちが少なくなき、過去に街おこし活動で発行した地域通貨のアイデアが浮かんだ。

掃除や広報誌の配布など、NPOの仕事の手伝いをすれば、「まーぶ」を渡し、センター内の食堂などで使えるようにした。外部の協力店も徐々に増え、昨年6月にキューズモールが加わった。

子供たちの自信深まる

協力店はモール内の映画館や衣料品店、飲食店など83店を含め110店に拡大。昨年度は約390万円分が発行され、2500人以上が利用した。

みのおキューズモール総支配人の桑原克典さん(41)は「地域貢献活動の一環だが、小さい頃から施設のファンになってもらえ、売り上げにもつながる。メリットは大きい」と説明する。

NPOの食堂をよく利用する小学3年の女兒(9)は「初めて『まーぶ』をもらった時はうれしくて、アイスクリームを三つも買った。お小遣いでは買えない雑貨も買えるようになった」と笑顔を見せる。見守ってきたスタッフによると、学校生活にも意欲的になったという。「まーぶ」をこつこつとためて母の日のプレゼントを買った子供もいる。

同NPOの松村幸裕子さん(31)は「以前は、家庭が経済的に苦しいからと自信を持ってない子供もいたが、『まーぶ』を通して、自力で人生を切り開くことができると思うようになってきている。さらに活動を広げたい」と話している。(斎藤七月)

福祉用具プランナー研究ネットワークが初の大会 優れた福祉機器の表彰も

福祉新聞 2015年07月16日 福祉新聞編集部

あいさつする廣瀬代表



福祉用具プランナーの全国組織「福祉用具プランナー研究ネットワーク」（廣瀬英紀代表、略称＝プラネット）の第1回研究大会が5日に開かれ、約100人が参加した。

プラネットは、福祉用具の選定支援や利用計画策定、適合状況評価などを行う専門職としてテクノエイド協会が養成しているプランナー（資格取得者は約1万2000人）の全国組織として昨年

10月に発足した。

研究大会前の総会であいさつした廣瀬代表は、会員数が約300人となったことなどを報告。プランナー同士の相互研鑽、連携の場として「プラネットを盛り上げていきたい」などと述べた。

研究大会では、福祉用具アワードの表彰式や会員による21の研究発表、シーティングエンジニアの光野有次氏のシーティング講座などが行われた。

「福祉用具利用における理学療法士（PT）に期待される役割」について報告した中村静江さんは、都内の作業療法士や介護支援専門員などを対象に行ったアンケート調査結果を踏まえ、多職種が連携して福祉用具の適合を進める必要性などを指摘。「PTには、身体機能・ADL機能の評価、困難事例への対応などを期待する声が多い。PTの福祉用具にかかる専門性をもっと向上させる必要がある」などと語った。

優れた福祉機器を表彰

研究大会では、優れた福祉機器を投票で選ぶ「第1回プラネット福祉用具アワード」の表彰式も行われた。ノミネートされた製品の中から、プラネット会員が「革新性」「普及力」「支援力」の部門ごとに1票ずつ投票。各部門の上位3製品が星を一つずつ獲得し、3部門すべてで選ばれば三つ星になる。

大賞に当たる三つ星の製品はなく、二つ星に㈱モリトーの移乗用シート「移座えもんシートBLACKシリーズ」と、㈱松永製作所の簡易調整機能付き車いす「ネクストコアシリーズ」が選ばれた。

モリトーの森島勝美・代表取締役は「賞は大変光栄なこと。福祉機器の重要性をもっと広めていきたい。当社はリフトと歩行支援機がメイン。次は三つ星を取れるよう頑張りたい」などと述べた。

一つ星の製品は次の通り。

◇革新性▽介護ベッド「超低床フローアーベッド」フランスベッド㈱▽排せつ機器「ベッドサイド水洗トイレ」TOTO㈱

◇普及力▽介護シューズ「あゆみシリーズ」徳武産業㈱▽手すり「たちあっぷシリーズ」矢崎加工㈱

◇支援力▽高機能エアマットレス「オスカー」㈱モルテン▽体圧測定機器「SRソフトビジョンシリーズ」住友理工㈱

皇太子さま、大阪入り

時事通信 2015年7月16日

皇太子さまは16日午前、第51回献血運動推進全国大会出席のため、羽田空港発の民間機で大阪府に到着された。同日午後、知的障害のあるアーティストの作品を販売し、経済的自立を支援する福祉施設「アトリエインカーブ」などを視察。17日に大阪市で開かれる同大会に出席し、空路帰京する。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

